

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2025・06・04



右の写真は、沖津昭治さんが県道 711 号沿いに私財で建立された「めだかの碑」。後ろには「めだかの学校」の歌碑が五線譜で造られています。水田ビオトープのすぐ近くにあるのでご覧になっている会員の皆さんも多いと思います。この曲が発表されたのは昭和 25 年。NHK の子供向け童謡番組で安西愛子が歌いました。作詞 茶木滋、作曲 中田喜直。当時、茶木さんは製薬会社に勤めるサラリーマンでしたが、童話や童謡が好きで、創刊されたばかりの「赤い鳥」に投稿を繰り返していました。（「赤い鳥」の編集には北原白秋も参加していたはず）茶木さんの浜町の家は 8 月 15 日終戦の日の小田原への空襲で焼失したのですが、当時、箱根に疎開をしていたため難をのがれたそうです。終戦から 1 年ほど後に食料の買い出しに小田原へ出かけてきた折に、荻窪用水に泳ぐメダカを子どもが見つくて、そのときのやりとりを思い出して「めだかの学校」の詩は書かれたと言われています。荻窪用水といえば早川水系なので、？マークを付けたくりますよね。このあたりの史実はどうも怪しいところもあって、子どもの年齢も 3 歳という説、6 歳という説など明確ではありません。3 歳の子どもが「誰が生徒か、先生か」なんて言わないだろうなんていう意見も出ています。荻窪用水という説も、酒匂川の間違いではないのか、という説もありハッキリはしていません。



作曲の中田喜直といえば代表曲は「夏の思い出」♪夏がくれば思い出す はるかな尾瀬 遠い空 水芭蕉の花が咲いている～のそう、あの歌です。尾瀬を一気に人気の観光地に踊りださせた名曲となりました。僕がこの歌に出会ったのは高校時代か大学に入学したてか、ともかく 60 年ほど前のこと。でも実際に尾瀬の地を踏んだのは 30 年近くすぎた 1994 年のこと。家内と家内の母親との 3 人旅で、山小屋に泊まり、尾瀬沼周辺を歩き回りました。初秋だったので綺麗な草紅葉が印象に残りました。「夏の思い出」の作詞は江間章子さん。江間さんには団伊玖磨作曲の「花の街」という名曲もあります。そして、中田喜直さん、横浜のフェリス学院大学で長く音楽の指導を行いました。その教え子に、小田原少年少女合唱隊で 60 年子どもたちを指導してきた桑原妙子さんがいらっしゃいました。その桑原先生も、浜町の自宅から二宮に移られていて終戦の日の空襲を避けることが出来たというお話を聞いた記憶があります。合唱団として、内外に評価の高い小田原少年少女合唱隊にぜひとも「めだかの学校」「めだかの歌」（当会のオリジナル曲）を歌ってもらいたいという願いに答えていただき、その音源は CD として当会の宝物となりました。その桑原先生は 2 年ほど前に指導の道を退かれ、後身の手で、「おだわらジュニア・スクイヤー」として歩き始めています。でも子どもたちが集まらないで苦労されているというお話も漏れ聞こえてきています。桑原先生から、メダカだけではなく、子どもの合唱団も全国的に絶滅危惧種なんですよと言われたことを僕はよく覚えていて、ダンスやリズム重視の音楽環境に、ウーンと頭を抱えてしまうのですが、日本語の美しさや日本人独特の「四季の自然」への情緒的感性を失っていくのは残念というしかありません。

**AI の世になろうが、子どもたちに残したいのは、
「情緒」です、日本人の「文化」なんですから。**